

カール・ベッカー研究室紀要『いのちの未来』創刊の意義

山崎浩司

(信州大学医学部・准教授、『いのちの未来』編集副顧問)

京都大学大学院人間・環境学研究科 共生人間学専攻 人間社会論講座 社会行動論分野
カール・ベッカー研究室の紀要『いのちの未来』の創刊を、心からお祝い申し上げます。創刊号共同編集委員長の駒田安紀さんと澤井努君をはじめとする編集委員会の皆さん、編集顧問の林貴啓君、査読を引き受けてくださったベッカー研 OB・OG の皆さんの多大なご尽力と、ベッカー先生による温かな叱咤激励により、多くの困難を乗り越えて、本紀要は世に出ることができました。関係者の皆さんに最大の賛辞と謝意を贈ります。

研究の世界では、紀要は学会誌や商業的に確立された専門誌に比べ、一段低く見られている現状があります。しかし、研究の世界にこれから本格的に参入しようと考えている大学院生にとって、紀要は、学術論文の執筆や発表について基本的なことを学ぶ最良の場となりうる、と私は思います。

いや、それだけではありません。本紀要は研究室の紀要であり、編集委員会が現役の大学院生や、研究室から巣立ったばかりの若手 OB・OG の研究者などで構成されています。つまり、小規模であるとは言え、学術雑誌を編集して創るという創造的な営みについても、彼らは実践的に学んでいます。そして、本紀要とのかかわりは、査読を引き受けてくださったベッカー研のシニア (?!) OB・OG にとっても、教育的な観点から査読し建設的な助言をするなど、査読経験を積み、その技術を磨いていくよい機会となっているはずです。

学問の世界でクオリティの高い研究を生み出すという次元からすれば、紀要というのはやはり練習場でしかなく、その意味では「たかが紀要」です。しかし、クオリティの高い研究を生み出す第一歩がこの練習場にある、という見方からすれば、「されど紀要」です。本紀要『いのちの未来』にさまざまな形でかかわったベッカー圏 (←誤字ではありません！) の皆さんが、これから (も) 学術的にも社会的にもクオリティの高い研究の産出に携わっていかれることと、引き続き同門としての縦横のつながりを大切にしていかなれることを、切に願っております。

2015 年 5 月吉日、鶯の鳴き声が麗しい三(さん)がく都(と) (学都・岳都・楽都) 松本にて
記す